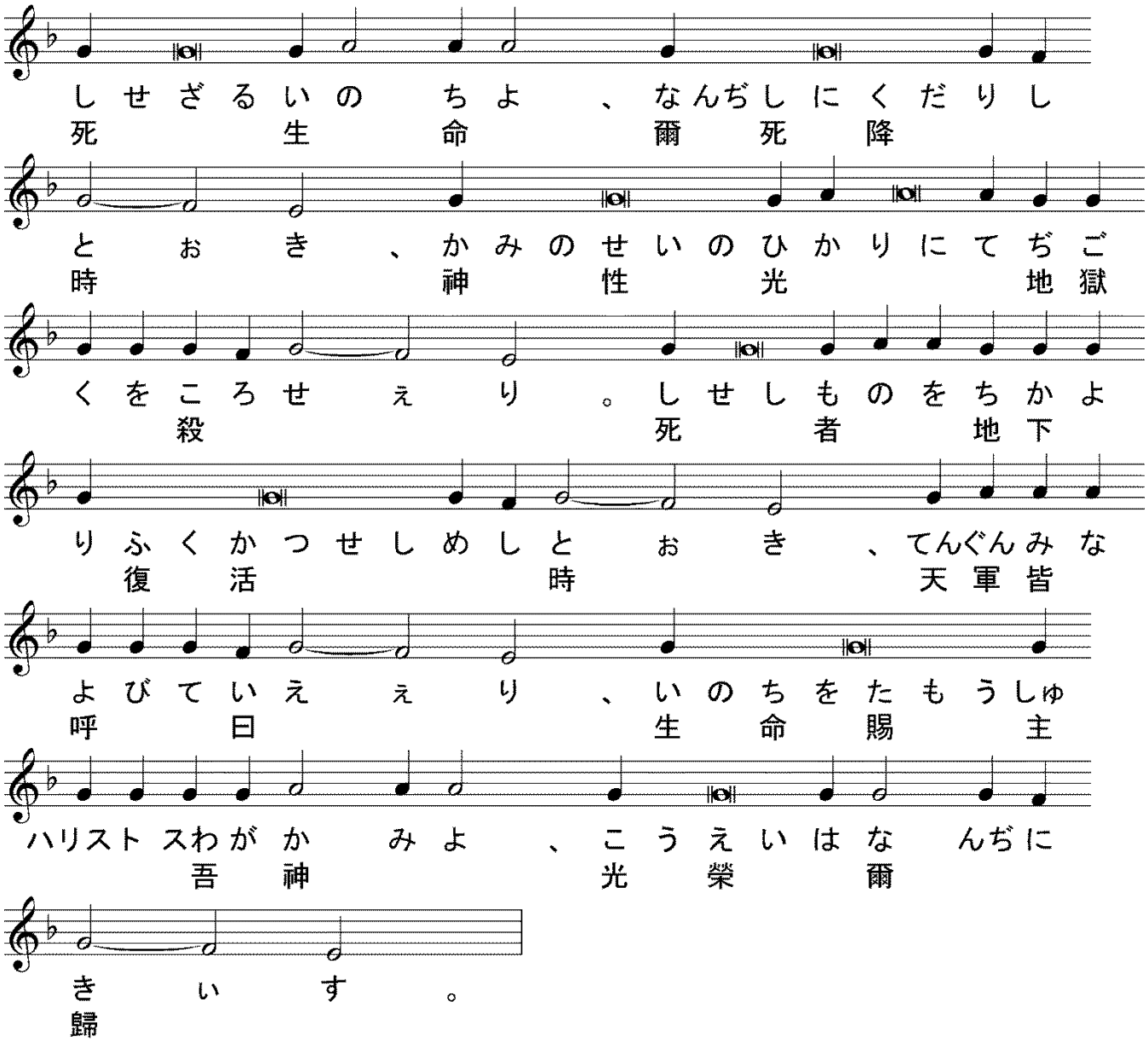
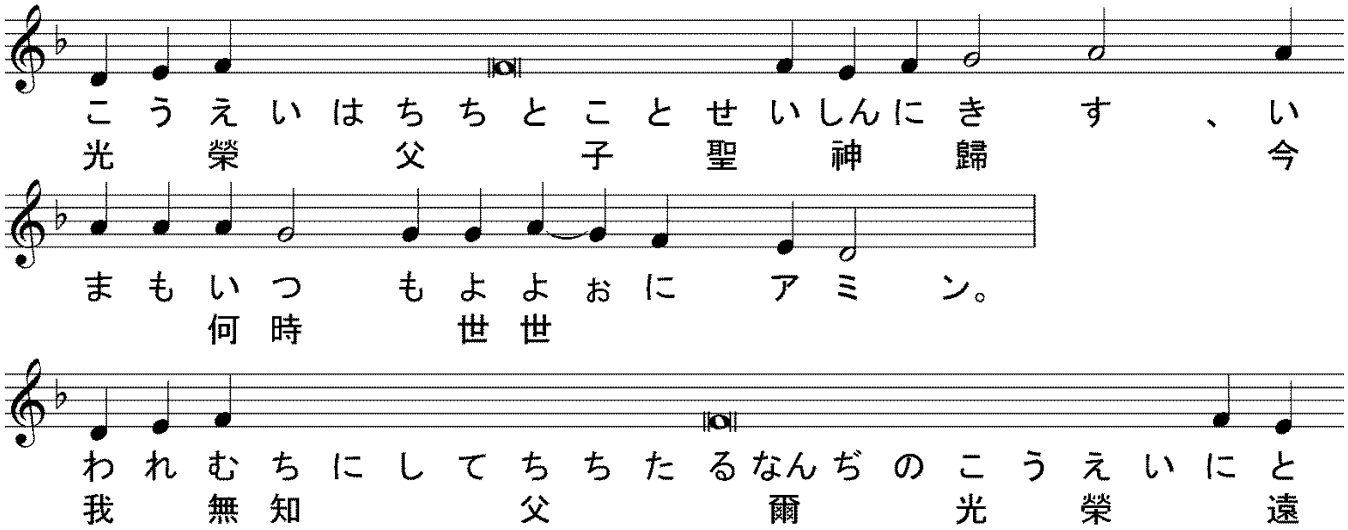
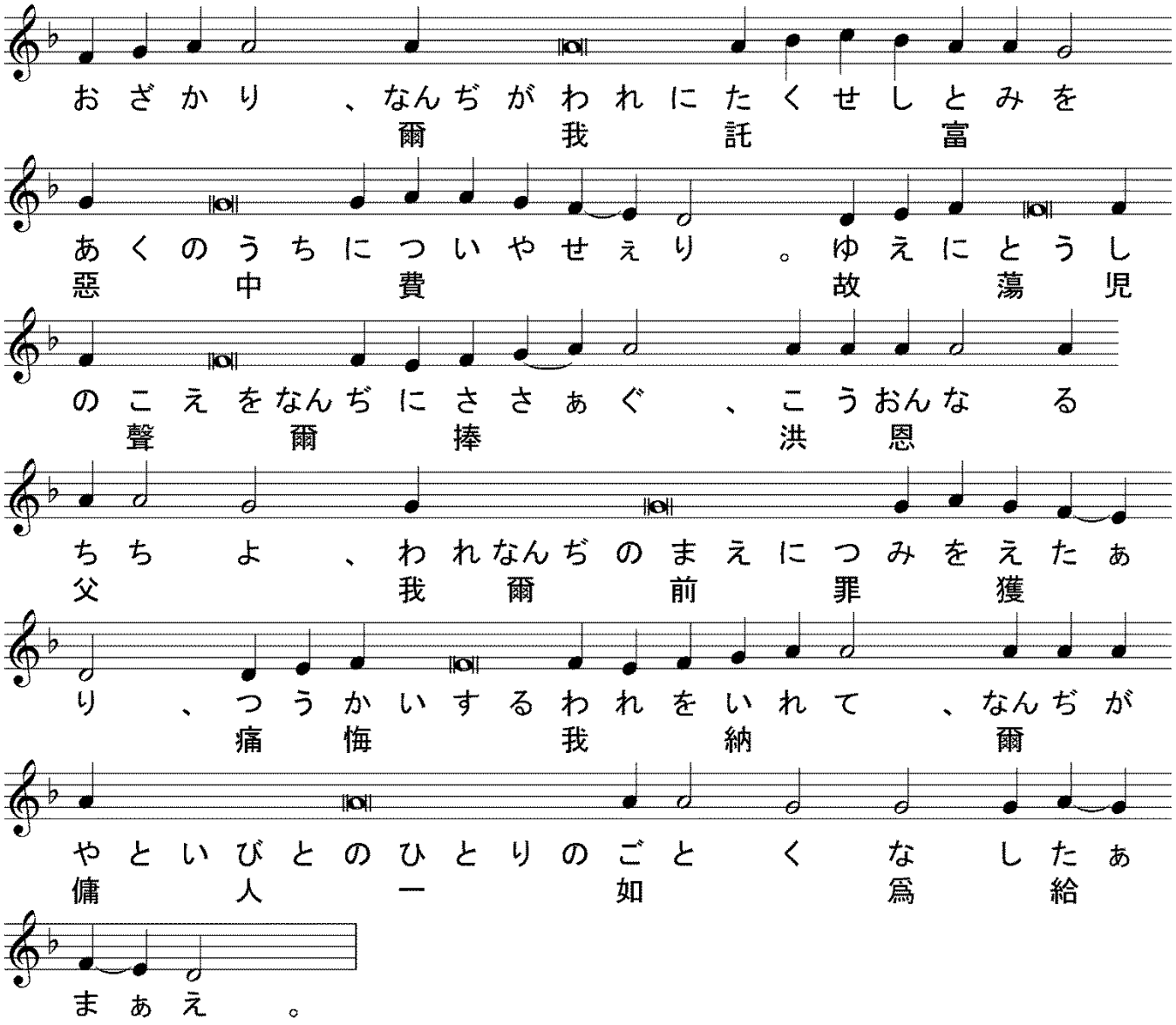
【　復活のトロパリ　第２調　】



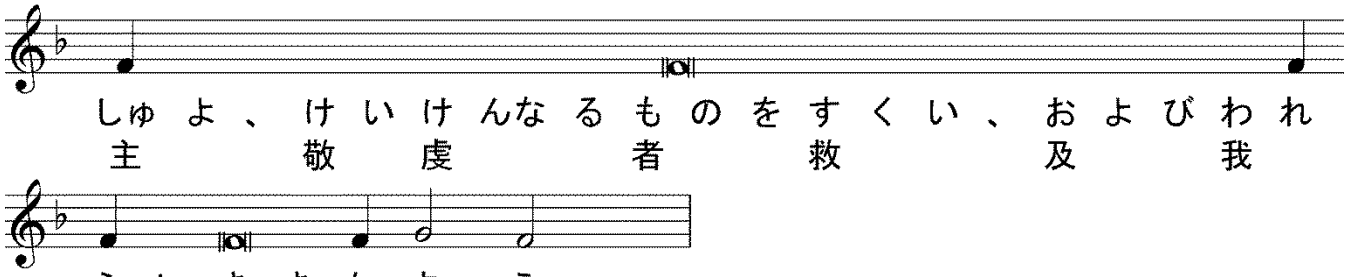
【　蕩児のコンダク　第３調　】





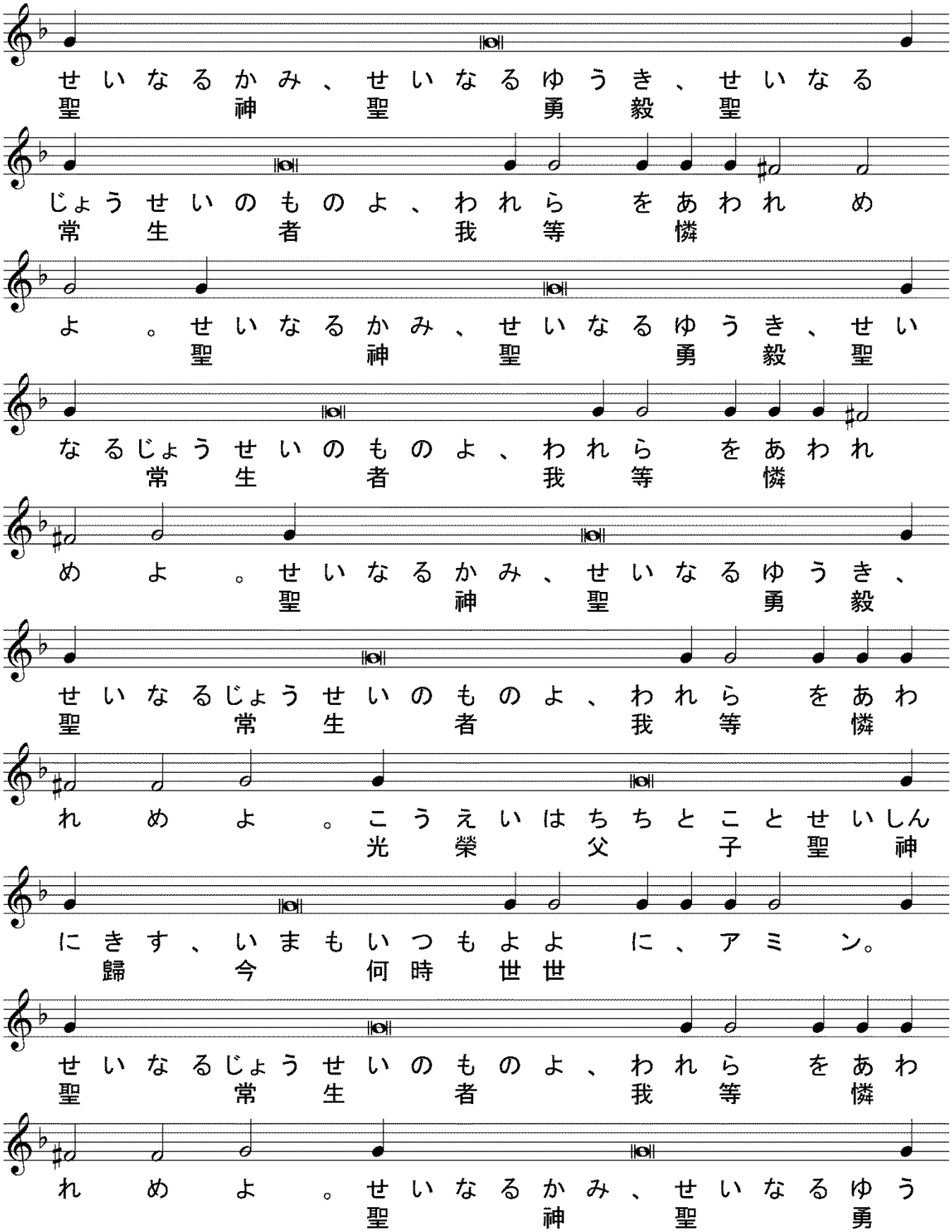
【　聖三の歌　】

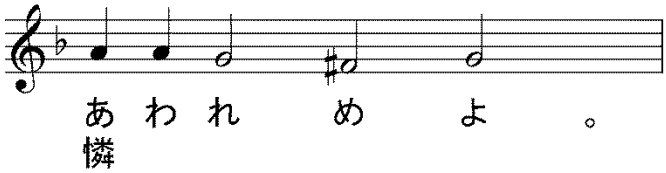
代禱）主よ、敬虔なる者を救い、及び我等に聆き給え、



代禱）世世に、

アミン。

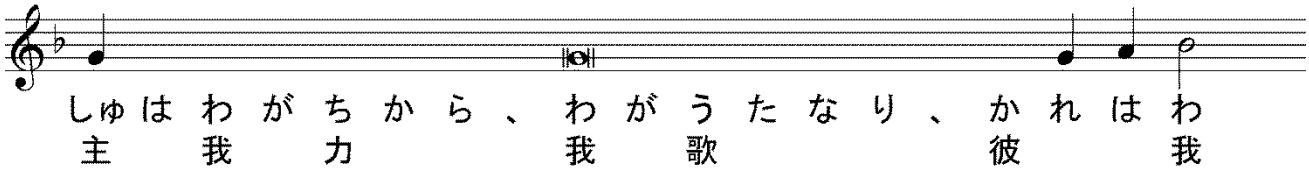

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖神聖勇毅聖
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常生者我等憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖神聖勇毅聖
なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常生者我等憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖神聖勇毅
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖常生者我等憐
れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光榮父子聖神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸今何時世世
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖常生者我等憐
れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
聖神聖勇

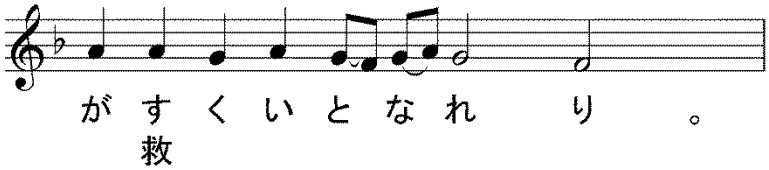


【　提綱（プロキメン）　主日第２調　】

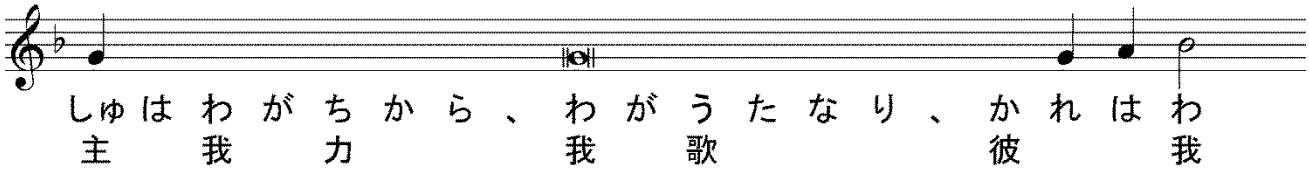
代禱）睿智（えいち）、

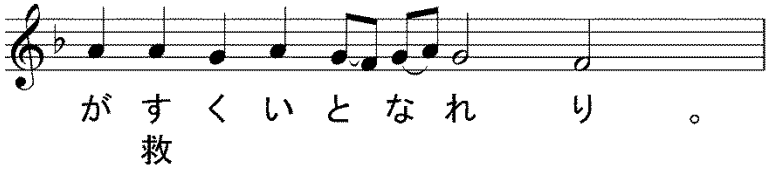
誦經）プロキメン、主（しゅ）は、我（わ）が力（ちから）、我（わ）が歌（うた）なり、彼（かれ）は我（わ）が救（すくい）となれり、



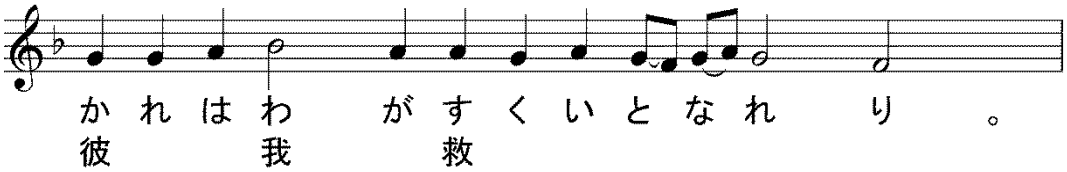


誦經）主（しゅ）は嚴（きび）しく我（われ）を罰（ばつ）したれども、我（われ）を死（し）に付（わた）さざりき、





誦經）主（しゅ）は、我（わ）が力（ちから）、我（わ）が歌（うた）なり、



【　使徒經（アポストロス）135端　コリンフ前書6章12～20節　】

代禱）睿智（えいち）、

誦經）聖使徒パヴェルがコリンフ人（じん）に達（たつ）する前書（ぜんしょ）の讀（よみ）、

代禱）謹みて聽くべし、

誦經）兄弟よ、凡の物我に許されたり、然れども凡の物益あるには非ず、凡の物我に許されたり、然れども其一も我に主たるべからず。食は腹の爲、腹は食の爲なり、然れども此と彼と神之を廢せん、身は淫行の爲に非ず、乃主の爲なり、主も亦身の爲なり。神は主を復活せしめたり、其能を以て我等をも復活せしめん。豈知らずや、爾等の身はハリストスの肢なるを。故に我ハリストスの肢を取りて、淫婦の肢と爲さんか、然すべからず。或は知らずや、淫婦に附く者は此れと一體と爲るを、蓋云えるあり、二の者は一体と爲らんと。然れども主に附く者は主と一神と爲るなり。淫行を避けよ、凡そ人の行う罪は身の外に在り、然れども淫を行う者は己の身を犯すなり。豈知らずや、爾等の身は爾等の衷に居る聖神、爾等が神より受けし者の殿にして、爾等己に屬するに非ざるを。蓋爾等は價を以て買われたり、故に均しく神に屬する爾等の身を以て、爾等の靈を以て、光榮を神に歸せよ。

＊＊

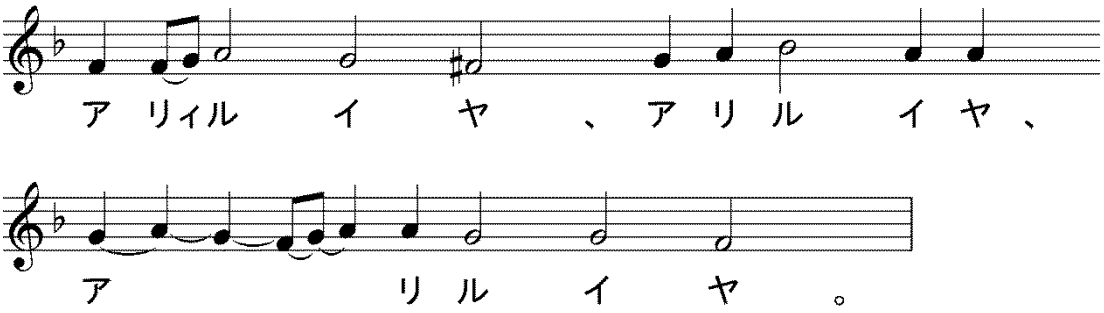
（比較用　口語訳）兄弟たちよ、すべてのことは、わたしに許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは、わたしに許されている。しかし、わたしは何ものにも支配されることはない。食物は腹のため、腹は食物のためである。しかし神は、それもこれも滅ぼすであろう。からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためである。そして、神は主をよみがえらせたが、その力で、わたしたちをもよみがえらせて下さるであろう。あなたがたは自分のからだがキリストの肢体であることを、知らないのか。それだのに、キリストの肢体を取って遊女の肢体としてよいのか。断じていけない。それとも、遊女につく者はそれと一つのからだになることを、知らないのか。「ふたりの者は一体となるべきである」とあるからである。しかし主につく者は、主と一つの霊になるのである。不品行を避けなさい。人の犯すすべての罪は、からだの外にある。しかし不品行をする者は、自分のからだに対して罪を犯すのである。あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。

＊＊

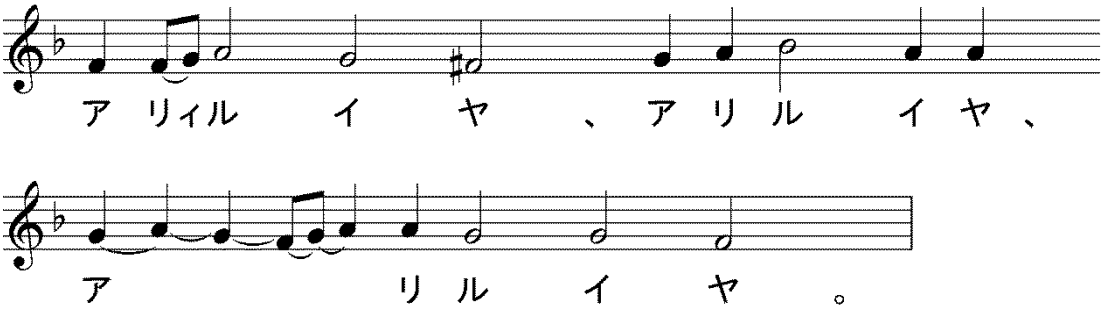
【　アリルイヤ　主日第２調　】

代禱）睿智、

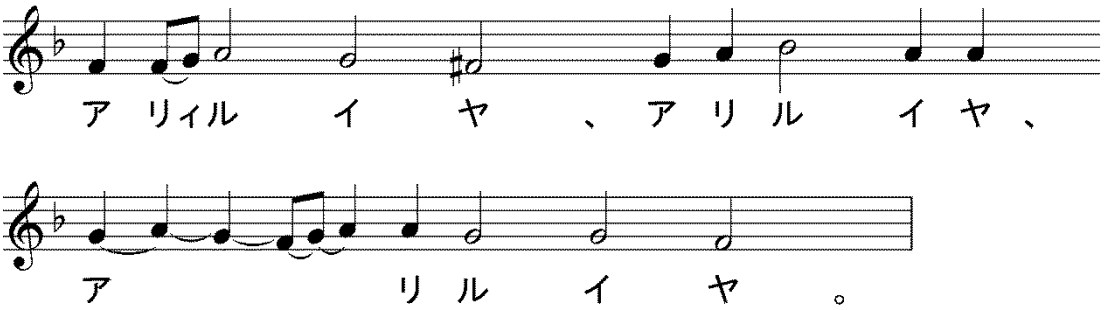
誦經）アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、



誦經）願(ねが)わくは主(しゅ)は憂(うれい)の日(ひ)に於(おい)て爾(なんぢ)に聽(き)き、イァコフの神(かみ)の名(な)は爾(なんぢ)を扞(ふせ)ぎ衛(まも)らん、



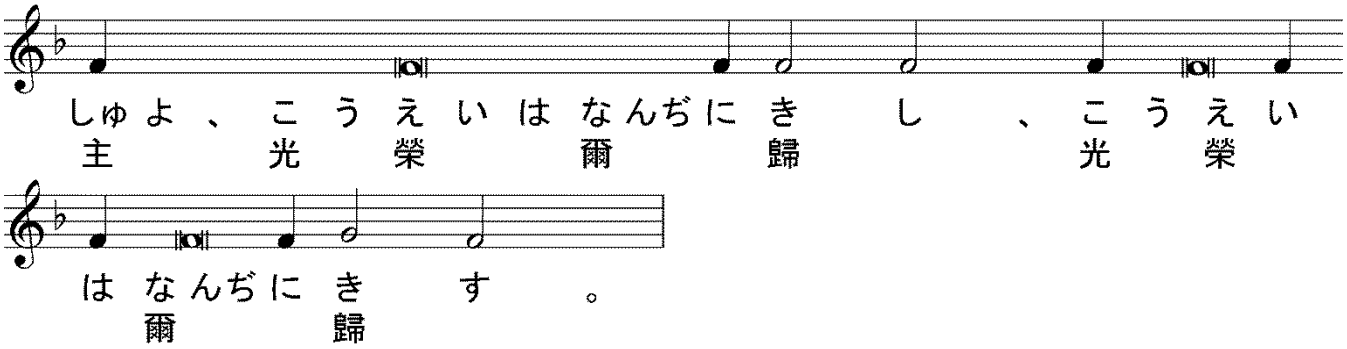
誦經）主(しゅ)よ、王(おう)を救(すく)え、又(またわれら)我等(われら)が爾(なんぢ)に呼(よ)ばん時(とき)、我等(われら)に聽(き)き給(たま)え、



【　福音經（エヴァンゲリオン）　ルカ福音書79端　15章11～32節　】

代禱）睿智(えいち)、

誦經）ルカ傳(でん)の聖福音經(せいふくいんけい)の讀(よみ)、



代禱）謹みて聽くべし、

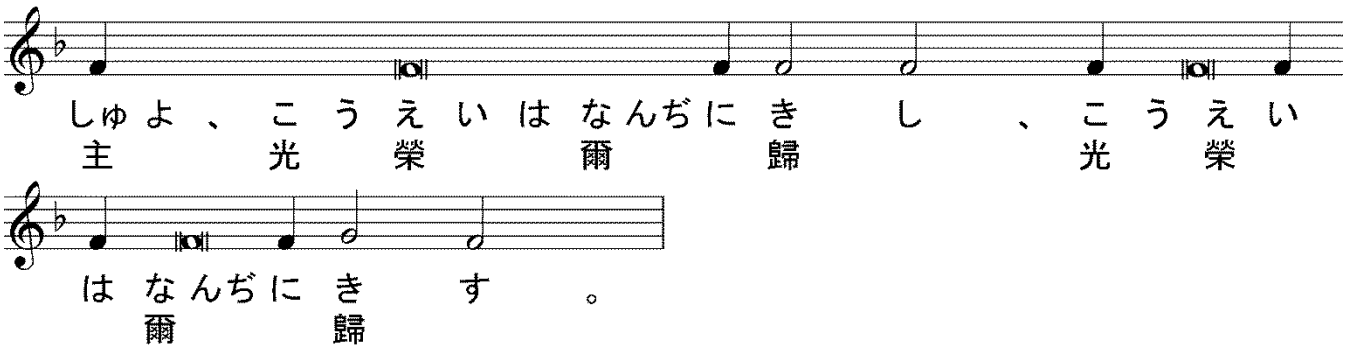
誦經）主は左の譬を設けて曰えり、或人に二の子あり、其次子父に謂えり、父よ、我が得べき産業の分を我に與えよ、父其産業を彼等に分てり。幾日も經ざるに、次子は其得たる者を盡く集めて、遠き地に旅行し、彼処に放蕩に生活して、其産業を浪費せり。盡く耗ししに及びて、其地に大なる饑饉起り、彼始めて乏しきを覺えたり。乃往きて、其地の住民の一に身を寄せたれば、其人彼を田に遣して豕を牧わしめたり。彼は豕の食う豆莢を以て、其腹を充たさんと欲したれども、彼に與うる者なかりき。遂に自ら省みて曰えり、我が父には幾何かの傭人の糧に餘れるあるに、我は飢えて亡ぶ。起ちて、我が父に往きて、之に謂わん、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず、我を爾が傭人の一の如く爲せと。乃起ちて、其父に往けり。尚遠く在りし時、其父彼を見て憫み、趨り前みて、其頸を抱きて、彼に接吻せり。子は之に謂えり、父よ、我天及び爾の前に罪を獲たり、既に爾の子と稱えらるるに堪えず。然れども父は其諸僕に謂えり、最も美しき衣を出して、彼に衣せよ、指鐶を其手に、履を其足に施せ。且肥えたる犢を牽きて、之を宰れ、我等食い樂しまん。蓋此の我が子は死して復生き、失われて又得られたり。是に於て彼等樂しめり。適其長子田に在りしが、歸りて、家に近づける時、樂と舞とを聞きたれば、一の僕を呼びて、是れ何事ぞと問いしに、彼曰えり、爾の弟來りしなり、爾の父は、其恙なくして彼を得たるに因りて、肥えたる犢を宰りたり。長子怒りて、入るを欲せざりき。其父出でて、彼に勸めしに、彼父に答えて曰えり、視よ、我多年爾に事えて、未だ嘗て爾の命に違わざれども、爾未だ嘗て小山羊を我に與えて、我を友と共に樂しましめざりき。然るに此の爾の子、妓と共に爾の産業を耗ししの來りし時は、爾彼の爲に肥えたる犢を宰れり。父彼に謂えり、子よ、爾は常に我と

偕(とも)に在(あ)り、我(われ)に屬(ぞく)する者(もの)は皆(みな)爾(なんぢ)に屬(ぞく)す。惟此(ただこ)の爾(なんぢ)の弟(おとうと)は死(し)して復生(またい)き、失(うしな)われて、又(また)得(え)られたるが故(ゆえ)に、我等(われら)喜(よろこ)び樂(たの)しむべきなり。

＊＊

（比較用　口語訳）主は譬をお話しになった。ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行き、そこで放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききんがあったので、彼は食べることにも窮しはじめた。そこで、その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼を畑にやって豚を飼わせた。彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はなかった。 そこで彼は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません』。しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』。それから祝宴がはじまった。ところが、兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなさったのです』。兄はおこって家にはいろうとしなかったので、父が出てきてなだめると、兄は父にむかって言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。それだのに、遊女どもと一緒になって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふりなさいました』。すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』」。

＊＊



※代式祈祷③へ